

八千代の里山に花が還ってきました

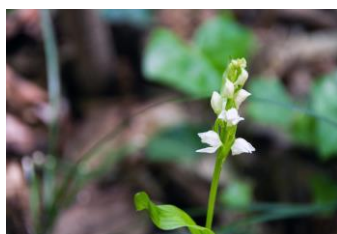
冬の間、ふっくらと積った落ち葉が太陽を一杯吸収し、肥沃になった林床に新緑と共に一斉に山野草が芽吹き、そして今までに観られなかった花々が咲きみだれます。キンラン、ギンラン、シュンラン、サイハイラン、マヤラン、イカリソウなどなど。今では多くの山野草が蘇りました。

うっそうとした森、陽の入らない森の整備を始めて10年近くになりました。今では明るくなった林床に眠っていた山野草が目を覚まし、みんな競い合って花を咲かせています。里山活動は伐採、整備の段階を経て、ようやく、かつての里山の自然を楽しませてくれるようになりました。

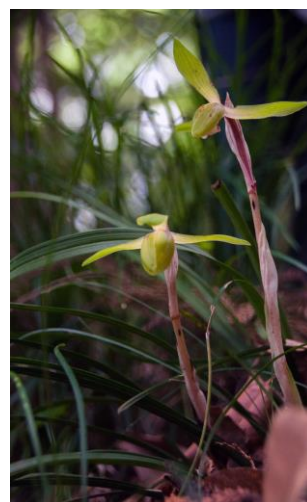
植生調査も進み、樹木は常緑樹、落葉樹を合わせ81種、山野草が73種（内、15種類の絶滅危惧種、要保護種が確認されています）、シダ植物は20種です。これからも里山活動をしながら自生する生き物調査と保護を続けていきます。



キンラン



ギンラン



シュンラン



サイハイラン



イカリソウ

バイオネストで虫たちの楽園を

落ち葉の季節になり虫たちは長い冬眠に入っています。5年前に地元の中学校生と一緒に作ったバイオネストが風雪で痛み、崩れかけていたので、今回も野外活動の一環として、40名ほどの中学生たちと作り替えることになりました。

崩れた場所で冬眠中のカブトムシの幼虫を見つけ、手に触って歓声を上げる生徒や悲鳴を上げる生徒で興奮状態でした。せっかく眠っているところを起こしてしまいましたが、ふかふかの落ち葉のふとんの中へ優しく寝かせてあげました。来夏には元気に羽化するのを皆で待っています。



カブトムシの幼虫たち



出来上がったバイオネスト

岡田拓也 (八千代市)

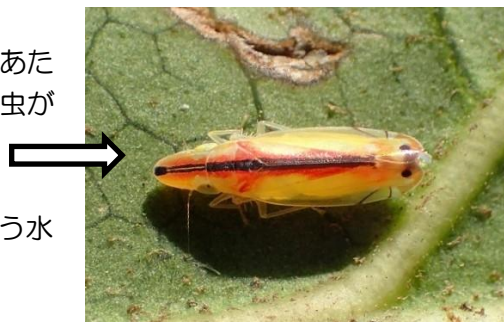
冬、そうだ虫を探しに行こう！

田島正子(船橋市)

ガサゴソガサゴソ、落ち葉を踏みしめて歩く冬の散歩は楽しく、風のあたらない日溜まりは本当に気持ちがいいものです。足元の落ち葉は虫の食べあとだらけ。「あ〜、虫はどこに行ってしまったのだろう？虫の賑わいが恋しいなあ」と寂しくなり、虫に思いを馳せます。卵、幼虫、蛹、成虫、それぞれ得意のスタイルで、虫はどこかに隠れているはず。どこにいるのかな〜？

常緑樹の葉の裏をそっとめくってみましょう

おすすめはヤツデやアオキです。大きな葉の裏は、雨や風があたりず快適。クロスジホソサジヨコバイという、ヘンテコリンな虫が見つかりました。さて、どちらが頭でしょう。



積んである枯草の下でゴソゴソトントン

枯草はあったかい布団のようなもの。枯草の下に台所で使う水切り籠を入れて、ふるいにかけてと沢山の虫が落ちてきます。

草の根元をかき分けてみましょう

暖かい風があたらない塀などの下がおおすすめです。小さなシャベルで草をかき分けると、ゴミムシ、カメムシ、クモなど、沢山の虫たちが次から次に顔を見せてくれます。こういう場所を見つけておくと、冬でも沢山の虫たちに出会えます。

他にも、伐採木、板や人工物の下、樹名板の裏、落葉の中、土中など虫たちの越冬場所は沢山あります。また、木は春〜秋だけではなく、冬も虫たちの居場所を提供してくれています。葉っぱの他に、芽、くぼみ、洞、樹皮の下、葉が集まったごみのようなかたまり、根元・・・、木をじっくり虫メガネで見えていくと、小さな出会い&発見があります。



ケヤキの樹皮の下 宝箱や〜！

冬はフユシャクに会いたい！

フユシャク(約 35 種)は、晩秋から早春まで、時期をずらして現れます。夜行性のものが多く、日が暮れてから活発に飛びかいます。春に葉を食べた幼虫は、土の中で蛹になり休眠、冬になるのを待って成虫になります。メスは翅が退化しており飛ぶことができません。フユシャクは、どうして氷点下まで気温が下がる冬にあらわれるのか？なんと不思議で魅力的な蛾です。フユシャクの観察は夜がいいのですが、寒い季節ですので夜に出かけるのは大変です。日中、観察できるおすすめの場所は、クヌギやコナラやサクラなどがある公園や雑木林の手すりです。また、明かりにもやってきますので、コンビニや公園のトイレなどでも見られることがあります。神社の灯籠にもやってきます。



明治神宮の灯籠。いろいろな種類の蛾が見られます。

冬鳥に会いたな

ここ数年冬になるとソワソワして来る。冬鳥に会いたいな。誰か誘ってこないかな。

それというのも私には鳥のことがちっとも分からない。見分けがつかない。声が聞こえても探せない。双眼鏡の操作が下手。遠くの鳥が良く写るカメラもない。でもやっぱりいろんな鳥に会いたい。かわいい声を聞きたい。猛禽も見られるかなと心が騒ぐ。

そんな私を誘って鳥見に連れて行ってってくれる優しい友がいる。微かな気配に鳥を見つけ「ほら、そこ」と声を掛けてくれる。

先日もそんな仲間と北印旛沼に出かけた。成田線の安食駅から歩くコース。沼の近くまではタクシーのお世話になってちょっと楽をする。歩き始めるとすぐ青空にノスリの姿。幸先が良い。遠くに田起こしをするトラクターが見える。いるいる。すぐ後を付いて歩いて虫探しをするタゲリが。今日一番会いたかった鳥。頭の冠羽も飛び立った時の白い体も素敵。彼らは賢い。田んぼで仕事をするトラクターの後を付いて歩くのご馳走にありつけるのがわかっている。その先、川に沿った道を歩く。カワラヒワ、トビ、モズ、ツグミ、アオサギ、スズメ、ヒヨドリ、カラス、ダイサギと次々お目見え。

「あっ、ベニマシコ」の声に振り向くも残念。あっという間に枯草の茂みに見えなくなる。ベニマシコも今日のお目当てだったのに。その後彼らが居そうな場所を丁寧に見て行ったのに終ぞ出会えなかった。そのうちまたトラクターの姿。先ほどよりも近くでの作業。やっぱりいるいるタゲリ達。ここでは何羽かのアオサギが大きな態度でトラクターの後を付く。タゲリはといえばちょっと控えめ。でも間近でその姿を見ることが出来いつまでも見ていたくなる。近くにはセグロセキレイ、ハクセキレイも見られる。彼らは私もお馴染み。その後田んぼの畔にヒシクイが4羽じっとしている。ヒシクイに合うのは初めて。前にオオヒシクイを見たけど、この子達も大きい。ここの田んぼは餌が十分なのかな。その後もノスリ、カワウ、カワラヒワ、ホオジロ、カシラダカに出会う。

そろそろ沼に沿った道。沼には沢山のホントに沢山のカモ達。しかし遠いのと逆光で種類が判別出来ない。いつもはもっと近くにも居ると言うのにこの日は沼に氷が張っていてみんな沼の中ほどに集まっている。時々誰かに追われたのか何十羽かが飛び立つ。近くに下りてくれないかなと思ったがそうもいかない。それでも歩いて行くと、オナガガモ、マガモ、オオバン、コガモ、ヨシガモ、カイツブリ、ダイサギ、カワウ、イソヒヨドリ、コサギ、カモメの仲間、バン、カンムリカイツブリなどたくさんの水鳥に出会う。午後になり太陽の向きが変わりヨシガモのかわいい頭が良く見えて感激。それから友が是非見せたいと言っていたトモエガモにも会えた。

最後は3時間に1本ぐらいのバスに乗るため大急ぎで歩いたが、たくさんの鳥、初めての鳥、お気に入りの鳥に出会えて楽しい一日だった。そして一緒に行ってくれた友に感謝の一日だった。

(草野幸子)



トモエガモ (撮影 小川洋子)



ヒシクイ (同)



タゲリ (同)

千葉はミヤコドリの宝庫

伊勢物語東下りの一節、旅の一行が隅田川に差し掛かると京には見慣れぬ鳥がいるのを見て渡し舟の船頭に問えば、あれはミヤコドリとの答え 都鳥と言うからには都の事も知っている筈と歌ったのが

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやしやと (在原業平)

ここでいうミヤコドリはカモメの仲間のユリカモメと解釈されて、東京都のシンボル鳥となり、新交通システムの愛称としてお馴染みです。物語の舞台となった場所は現在の浅草と向島を結び地域で言問の地名がのこり橋や通りの名前、名物の団子もあります。



写真奥の飛び立った白い鳥の群れがユリカモメ
手前の黒い鳥がチドリの仲間のミヤコドリです。
鳥図鑑の索引でミヤコドリを探せばこの黒い鳥のページが示される筈です。
通称のミヤコドリと正式名称のミヤコドリの2種は別ものですから要注意です。写真は2種が同時に写っている場面です。
以下はチドリの仲間の黒いほうのミヤコドリについての話題です。

1982年初版の「フィールドガイド日本の野鳥」によれば日本では数少ない冬鳥または旅鳥として渡来すると解説されています。また1994年に福岡県で発行された「和白干潟の生きものたち」の記述では全国でも定期的に渡来しているのは博多湾の和白干潟だけで、最大13羽が確認されており、和白干潟のシンボルと言える鳥ですと自慢気に紹介されています。

当時私は野鳥の会に入会したばかり、この鳥に強い憧れを持ち、是非見たいと思っていましたが、九州は遠く夢のまま数年過ぎたころから東京湾でも少しずつ見られるようになりました。

その後は年を追って数が増え、今では船橋三番瀬の常連で、越冬期の干潮時には数百羽の群れが一斉に餌取りに飛来する時があり壮観です。飛来後は次第に干潟に分散して嘴を器用に使って貝類を食べています。

潮が満ちて来ると岸近くに寄って来て大きな集団で飛び去る時あれば、分散して徐々に飛び去る時もあります。満腹になった鳥から帰って行くのでしょうか。

待避場所は三番瀬に隣接した防泥堤が多いのですが、高波や強風の状況により、又は釣り人が近づく等の危険があれば幕張海岸の突堤など湾内の安全な場所を利用していると思われます。

上の写真は海面に白波が見える強風の幕張突堤です。

尚、和白干潟の近況をネットで検索すると渡来数は20羽弱で横這いのようなようですから本場は完全に千葉に移ったようです。この様な珍鳥が県内で簡単に見られるなんて千葉県のカモメウォッチングは何と恵まれているのでしょうか。

ユリカモメの方も東京湾や外房、印旛沼でも見られて千葉はミヤコドリ2種の宝庫です。

佐倉市

坂本文雄

厳冬に耐える：ホソミオツネントンボ

<成虫で冬を越すトンボ>

冬のムシ探しは、枯草の中、落葉の中、土の中、朽ちた木の中、木の皮の下、石の下などを「ここだ！」と定めてひっくり返します。どんなムシが出てくるかわからないので、まさに「宝探し」と言えます。

フィールドをゴソゴソと探し回る私は、ムシは、厳しい冬の寒さから身を守るために隠れる、トンボは、卵かヤゴで冬を越すという固定概念と先入観を持っていましたが、これを覆してくれたのが「ホソミオツネントンボ」でした。

最初にこのトンボを見たときは、晩秋のころだったため「夏の生き残りかな?」「イトトンボにしては少し大きいな」と思い、さらに色も地味なことから特に気にも留めませんでした。家に帰りこの日に会ったムシの名前を図鑑で調べていて、出会ったトンボが「ホソミオツネントンボ（細身越年トンボ）」という名前です。成虫で冬を越す」ということを知りました。イトトンボの仲間(均翅亜目)は華奢な体で採集するとすぐ弱ってしまうことから「こんな体で雪や風に身をさらして冬を越せるのか?」「図鑑に書いてあることは間違いではないか?」と疑いました。

<春に成熟し鮮やかなブルーになる>

翌年の春、図鑑に書いてあったことが本当なのか確かめるためにフィールドで探しました。そして、出会ったホソミオツネントンボの体の色は、鮮やかなブルー変わっていました。私には、鮮やかなブルーが、「これから交尾する相手を見つけるぞ!」という意気込みを現しているように見えました。また、枝先から飛び姿は、春の日差しを喜んでるように思えました。

水辺では、交尾の様子も確認することができました。よく見ると、メスもオスほどではないですが、青く色づいていました。この時以来、ホソミオツネントンボは、冬のムシ探し、春のムシの探しの対象となりました。

<ホソミオツネントンボへの恩返し>

成虫で冬を越すことを選択したホソミオツネントンボは、私に「トンボ、ムシの多様性」と「先入観/固定概念を捨てること」を教えてくださいました。

国内にトンボは約200種いますが、成虫で冬を越すのは、本種を含めて3種で少数派なのです。このような希少な生態を持つトンボが身近にいることをより多くの人伝えていきたいと思います。

西野 孝法 (千葉市)



地味な枯葉色で冬を越す (オス)



地味な枯葉色で冬を越す (メス)



翌春、鮮やかなブルーに色づく (オス)



めでたくカップルになりました。メス (下) も色づいているのがわかります

こんぶくろ池

1. 身近な貴重種の調査

柏の南部、葛が谷で、植物調査をしています。柏市環境保全課に調査報告を提出するNPOかしわ環境ステーションへ調査報告を四季折々の変化を毎年行っております。

観察指導員の山下さん大貫と野草好きの方3人と楽しみながら、調査です。

なかでもナンバンギセルの群落の保全です。私有地のため将来はなんともいえません。

身近な自然の保護活動です。柏市では、5年に一度の全市の動植物調査を実施しています。

直近4年の報告書を添付いたします。



2. 「こんぶくろ池自然博物公園」の標本作成

柏市北部の公園管理の一環として植物採取を2006年から実施し、2021年3月末で、475種の管理を当初から山下指導員中心に、継続しています。

昨年5月13日～16日、「さわやかちば県民びらざ」で、NPO法人こんぶくろ池自然の森として10周年を迎え「こんぶくろ池展」をコロナ禍のなかでしたが、実施しました。標本と写真を並べ見やすく興味深く皆さんに見ていただくことができました。

公園緑政課、千葉大、東大との連携、市民、NPOの会員で、貴重種の守られる環境が、でき今後ともご支援いただけたらとおもいます。



2021年葛が谷カルテ

大津川グループ

地区の自然環境

- *剥土された台地部分は、ススキ草原となり、ナンバンギセルの寄生が著しい。
- *湿地部分は、ヒメハギ、コシオガマ、ウツボグサなどが外来種に押され減少の傾向。
湿地中央部にあった松が切り倒され、湿地部分は、草刈が絶えず行われるようになる。

多様性保全の方向

- *台地部分はススキ草原を再生・維持する方向で毎年冬季に草刈り機で、ススキの伐採を継続していたが、20年の倒木で冬季草刈ができずナンバンギセルの開花が減少した。昨年より、キンラン、フタリシズカを台地の林縁で発見できた。今後の刈り取り作業を行えば、生育は、期待できる。
- *湿地は、ヒメハギは、毎年の盗掘が、残念である。ナンバンギセルは、ススキの生育で、開花している。ヤマユリは、湿地、台地とも林縁に多数開花し、見事である。

<主な植物の開花変動>

	2018年	2019年	2020年	2021年
タチツボスミレ	多数 (○)	4 (△)	多数 (○)	多数 (○)
ニオイタチツボスミ	9 (△)	多数 (○)	多数 (○)	多数 (○)
アカネスミレ	多数 (○)	開花確認できず	確認できず	確認できず
ヒメハギ	3 (△)	開花確認できず	3 (○)	2 (△)
アマドコロ	10 (○)	17 (○)	10 (△)	13 (○)
ホタルブクロ	1 (△)	10 (○)	確認できず	確認できず
ヤマユリ	9 (△)	28 (◎)	20 (○)	27 (△)
ヒキヨモギ	数株 (○)	開花確認できず	確認できず	確認できず
ノコンギク	20 (○)	6 (△)	多数 (○)	多数 (○)
ナンバンギセル	2000 (○)	2000 (○)	1000 (△)	172 (△)
コシオガマ	12 (○)	開花確認できず	確認できず	3 (△)
ノハラアザミ	20 (◎)	8 (△)	35 (◎)	10 (△)
オトギリソウ	4 (△)	8 (△)	13 (○)	9 (△)
ウツボグサ	草刈 (×)	6 (△)	14 (○)	5 (△)
カリマタガヤ	多数 (○)	多数 (○)	多数 (○)	多数 (○)
テンツキ	多数 (○)	多数 (○)	多数 (○)	多数 (○)
ホトトギス	3	確認できず	確認できず	確認できず
マキエハギ	10 (○)	確認できず	10 (○)	確認できず
キンラン		1	1 (○)	1 (○)
フタリシズカ		9	18 (○)	多数 (○)

• 自然観察入門

昭和の森で NACS-J の講習を受け早 10 数年が経ちます。その時教わったことの一つに「この植物はここに存在しているのは何となくでは無く、ここに存在すべくして生きている」と生き物の生態系の基本を叩き込まれワクワクしたのを未だ覚えています。その後元々海が好きだった私は千葉県中央博物館主催の市川浜での底生物調査に参加しました。海の事は大抵知っている積りでしたが、ゴカイ類、貝類、甲殻類、海藻類、ハゼ類を主とした魚類、でその多様性にビックリして目から鱗でした。これらの種が存在すべくして生きている、すなわちバランスよく持続しながら生態系を維持しているのだから面白い。干潟の生き物たちも食うか食われるか、はたまた餓死するかでその種の数が一定に維持されている。多様性に富んだ干潟だからこそ渡り鳥が食事に数千キロも渡ってくる。このバランスを壊すのが人間であるが、修復するのも人間である。最近はその修復が間に合わない現状である。生物学者福岡真一氏の「動的平行」の言葉を思い出す。私は仕事で機械を造る事を 40 年間携わってきて「自ら壊して再生して」の概念はなかった。60 歳を過ぎて自然と付き合う当たり前の事に気付きそして驚いた。

• 三番瀬人工浜の多様な沿岸植物

三番瀬沿岸の話をししましょう。1980 年ー1981 年に造成された船橋海浜公園の人口海浜は珍しく植物群落の成立が見られ千葉県で 1988 年 10 月～1990 年 11 月において調査した。その記録が千葉生物誌 Vol.42 No3 (通巻 93 号)「船橋市人口浜の植物 I フロラ」に記載されており、約 140 種類の個体が確認されています。30 年後の現在どのように変わったのか中央博物館学芸員の由良先生のご同行で 2021 年 7 月 15 日船橋環境政策課課長及び市民 4 団体で調査しました。千葉県一般保護生物 (D)「ホソバナハマアカザ」の群落や可なり多くの「ハマヒルガオ」の群落が見られ嬉しかった。しかし外来種の「アレチウリ」「アメリカオニアザミ (事前調査で市にて駆除)」「ナガイツルノゲイトウ」など確認し自然植物に対する観察・管理の必要性を強く感じた。詳細を纏めるには後 2024 年の 7 月迄調査が必要であり船橋市環境政策課の「生物多様性戦略」の一環として、また、「ふなばし三番瀬環境学習館」の協力もお願いしながら調査を続けたい。是非 NACS-J のメンバーの方々の応援もお願いして頂ければ嬉しいです。



ハマヒルガオ



コメツブツメクサ



ホソバナハマアカザ

• 今後の自然観察

自然環境の素晴らしさを持続させるためには、共存する生き物の知識「ここに存在すべくして生きている」と守るべく環境の課題と対策の活動が必要と考えます。そのためには、あらゆる分野の団体と横の繋がりにより目標を決め助け合って (SDGs) 無理せず持続的な活動が確実と思われれます。